

【翻 訳】

「ルカノール伯爵」 (4)

—パトロローニオの書—

ドン・ファン・マヌエル

木 原 太 源 訳

第二十九話 「通りに身を臥して死を装った狐に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵が助言者パトロローニオと話をしておられた際、次のようなことを語られた。

「パトロローニオ、さる所領の領主である予の縁者は、弱小なるが故に数多の恥辱を回避し得ず、ために近隣の有力なる諸侯達は、彼が攻め入る口実くちまを与えてくれんものと願っておる。縁者が言うには『輩の傍若無人なる振舞いは忍び難く、徒いたづらに手を拱こまいて日々屈辱に耐えるよりも敢えて行に訴えたい』と。予は首尾よく事を成就してもらいたく、彼に与うべき助言をお前に聴かせてもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロローニオは返答した。「殿がこの件でご助言なさいますには、ある時死を装いました狐に生じました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトロローニオは語り出した。「一匹の狐がある晩鷄舎に侵入すると、雌鷄達を存分に弄びました。ところが、いざ戻ろうと致しました時、陽はすでに高く、通りは人の往来で賑っておりました。身を隠せぬことを知ると、狐は人目に触れぬよう通りに出、死を装って長々と己が身を横たえたのでございませぬ。人々はその姿を見て死んでいるものと思い、誰ひとり気に止めは致しませんでした。やがて通りかかったひとりの男が『狐の額の毛は、子供の額に付けければ、目の疾患ひょうまを防ぐ効果があるんだ』とつぶやくと、はさみで刈り取ったのでございませぬ。次に通りかかった別の男は狐の背の毛についても同様のことを申したのでございませぬ。また他の男は横腹の毛についてございませぬ。多数の者が次々このように言っては刈り取ったものから、狐はすっかり丸裸にされてしまいました。ところがそうされている間も狐は微動だにしなかつたのでございませぬ。毛ぐらい失くしたからとてたいした被害ひがいではないと考えたからでございませぬ。ところがひとりの男がやって参りますと『狐の親指の爪は癩瘡ひょうそに良く効くんだ』と言って剥ぎ取ったのでございませぬ。それでも狐はジツとしておりました。続いてや

って来た男は「狐の牙は歯痛をいやすのに持って来いだ」と言
って抜き取りました。それでも狐は身動きひとつしなかつたの
でございます。その後に行って来た男は「狐の心臓は心痛に効
き目があるんだ」と言って、ナイフを手に取りと抉り出そうと
致しました。心臓が剔出されようとしているのを知った狐は、
そうなれば心臓は毛のように再生する物ではないので徒死する
だけだと悟ると、何もかも奪われた上に命まで失くすのであれ
ば、ここは運を天に任せて行動する方が得策だと決断致しまし
た。そこで必死になって逃げ回りましたところ、ついに首尾よ
く逃げおおせたのでございます。

ところで伯爵様、縁者の方へはこのようにご助言なさって下
さい。「諸侯達の傍若無人なる行為を回避することも、連中の
侮辱に報いることもままならぬ領地で暮らすのが神の御意志に
よるものであれば、忍の一字で耐えることである」と。もし
て、被害が看過し得る程度のものであれば黙視するようお悟ら
せ下さい。人は、恥を搔かされたとか侮辱を受けたなどと思わ
ぬ時は、どうにかがまんも出来るものでございます。しかしな
がらそのことに気づいた場合、報復しなければなりません。こ
のようなことから、何事も出来得る限り看過することが最良な
のではございますが、事態が重大な局面に到りました場合は、
敢えてそれに身を投じるべきであり、黙視すべきではございま
せん。生き恥を曝すよりも、正義と名誉を守って討死するか、
身体の一部を失う方がはるかによいのでございます」

伯爵はこの助言をとてても有益であると判断された。

ドン・ファンはこの教訓談を本書に記すことを命じた。もし
て次のような詩を作った。

何事も忍の一字が大事なれど、
止むを得ぬ時には報復せよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十話 「セビーリャのアベナベット王とそ の妻ロマイキアに起った事につ いて」

ある時ルカノール伯爵は助言者パトローニオと話をされた
が、それはこのようであった。

「パトローニオ、予とさるお方とはこのような関係になつて
おる。つまりその御仁は度々予に支援を望まれ、かつ金子の援
助を乞われている。予がそれに応えたとその都度感謝されるの
だが、求めに応じる度毎に、予が以前にも増す好意を示さね
ば、予のこれまでの援助など知らぬ素振を示されるのだ。そこ
で予はお前の叡智を頼み、予の処すべき態度を助言してもらい

たい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿とお方との出来事は、セビーリヤのアベナベット王と妻ロマイキアとに持ち上りました事に似ております」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねにられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「アベナベット王はロマイキアをお妃に迎えられ、誰よりもこよなく愛しておられました。彼女は徳のあるお方でしたから、その立派な言行の数々は今なおモーロ人達の語り草となっているほどでございます。ところが、そのような彼女に似つかわしくない面が一つだけございました。それは彼女がとても気まぐれであったということでございます。

コルドバに滞在中のことでございます。二月のある日、雪が降り始めたのでございます。それを見てロマイキアは涙を流し出しました。王がその理由をお訊ねになりましたところ、

「雪見の出来る所へはこれまで一度も案内されたことがなかったからでございます」と応えました。そこで王は、彼女を喜ばせようと、コルドバ全土にアーモンドの木を植樹させられたのでございます。コルドバは温暖な所ですから雪の降ることなど滅多にない事でございます。故に、二月にアーモンドの花をつけると、雪の降り積った如く辺りはいち面白一色となり、彼女に雪見を楽しませてやれようのご配慮からでございます。

またある時、ロマイキアが川を望む部屋に戻りますと、川岸で泥を素足でこねては日乾しレンガを作っている女の姿が目に入りました。それを見て彼女は泣き出しました。そこで王がその理由をお訊ねになりますと、「これまで何事も自分の望み通りに行ったことは一度もないからでございます。あの女がやっている簡単な事でもでございます」と応えました。そこで王は彼女を喜ばせようと、コルドバにある大きな池の水と泥を除却させられますと、バラ色の水に、砂糖、肉桂、ラベンダー、丁香、種々の芳香草、琥珀、じやこう、その他入手し得る全ゆる香料や香水を投入させられ、さらに葦の代りに砂糖きびを植えさせられました。こういった物で池が満たされますと、殿もすでおわかりになりますように、これらで泥を造らせられたのでございます。そして「裸足になってこの泥を踏み固め、日乾しレンガを望むだけ造るよう」と、ロマイキアに申されたのでございます。

他日、彼女は再びほしい物があると言って泣き出したのでございます。そこで王がその理由をお訊ねになりますと、「王はこれまで私を喜ばせるようなことは何ひとつおやりになつたことがございせんもの。これを泣かずにはおられせんわ」と応えました。王は彼女の気に入るよう、加えて彼女の気まぐれをなだめるべく尽力されてきたことや、またこれ以上は手の施しようのないことを悟られますと、アラビア語で *Wa la na-*

har at-tin? とお述べにられました。これは「泥の時できえもか」という意味でございます。それは、他のことはともかく、彼女を喜ばせるべく泥造りをお命じになられたことだけは、忘れてはいけないことを悟らせようとなされたのでございます。

伯爵様、そのお方のためにいくらご尽力なされましても、要求を全て充たされないとすぐに殿のご行為を忘れ、感謝されないようなお方でありますならば、殿には害あるのみでございますから、何もおやりにならないことでございます。また殿にはどうぞ忠告申し上げておきます。もしどなたかが殿のためにお力添えをなされ、それが殿のご要求に充分応えてはおらなくとも、そのお方の行為に不満の意を表されてはいけません」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断された。そこでその通りに実行されたところ、結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、本書に記させた。そして次のような詩を作った。

人の行為に感謝しない者に、
身代を費やす必要はない。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十一話 「ある枢機卿がパリの大教会の聖

職者達とフランシスコ会の修道

士達とに与えた申渡について」

ある時ルカノール伯爵は助言者パトロニオとこのような話をされた。

「パトロニオ、朋輩と予は双方にとって都合のよいことをやりたいとおもっておる。予の方は今すぐにでもやれるのだが、相手が居らぬので先んじるつもりはない。そこで予は天恵たるお前の叡智を頼み、この件に関するお前の助言を聴かせてもらいたい」

「伯爵様」とパトロニオは応えた。「この件で最も都合なることをおやりになりますには、パリの大教会の聖職者達とフランシスコ会の修道士達との間に持ち上りました事をお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねにられた。

「伯爵様」とパトロニオは語り出した。「パリの大教会の聖職者達は、彼らが上位教会に所属するところから、一番に鐘を撞かねばならないと主張致しておりました。ところがフランシスコ会の修道士達は「われらは修業や、暁の勤行を唱えるのに早起させねばならず、もし鐘撞きに遅れをとれば務の時刻を逸することになる。われらは何の制約も受けてはおらぬので、

誰をも待つ必要はない』と申し立てました。

論争は長期にわたり、双方は弁護士に多大な出費を要しました。ついに新任の教皇はひとりの枢機卿にこの訴訟を委ねると、即座に裁定を下すようお命じになられたのでございます。

そこで枢機卿がこの件の訴訟記録を持って来させましたところ、それは一見して誰しもが驚くほどのぼう大な量でございますました。それを前にして枢機卿は判決を申し渡す日時を指定致しました。

判決当日、枢機卿は当事者達の面前で書類を全て焼却させると、次のように言い渡したのでございます。『兄弟達よ、この訴訟はあまりにも長引いたがために、双方は共にぼう大な出費と痛手を被った。故に予はその方達にこれ以上係争させたくはない。そこで次のように判決を申し渡す。先に目覚めた方が鐘を撞くことである。』

伯爵様、もしそれがお二人方にとって有利なことであり、殿はそれをおやりになれるのでございますならば、すぐさま事に当られ、看過なきようにとご忠告申し上げます。好機を逸すれば取り返しのつかぬ損失を招くことは度々でございます。後日やろうと致しましても、その時はすでに遅きに失つるからでございます」

伯爵はこれをとても有意義な助言であると判断された。そしてその通りに実行されたところ、結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、それ

を本書に記させた。そして次のような詩を作った。

有利に事が運べるのなら、
時機を失ってはならぬ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三十二話「ある王と機織の詐欺師達とに起った事について」

ある時ルカノール伯爵が助言者パトロニオと話をしておられた際、このようなことを語られた。

「パトロニオ、さるお方が参られ、とても重大な事をお申し出になられた。そしてそれが予には殊の外有利に働くと言及されておる。ところが『最も信頼の篤い者にもこの事は決して口外されんことを。もし漏らされれば身代は元より生命までも危険に曝らされるであります』と申されるのだ。そこで予は、お前の外に事の真否を判断し得る者などおらぬことを承知なるが故に、この件に関するお前の考えを聴かせてもらいたいのだ」

「ルカノール伯爵様」とパトロニオは返答した。「考えまするに、殿にとりまして最もふさわしい身の処し方をお知りい

たできませんには、ある王と三人の詐欺師達とに生じました事をお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「三人の詐欺師がある王の下へやって参りました。彼らは自らを機織の名人であると言乗り、とりわけ嫡子には見えて、非嫡子には見えない布を織る技術を持っていると申し立てました。すると王はこの話を大層お喜びになられたのでございます。その布を用いければ、王国内の民の何れが嫡子或は非嫡子であるのかを見極められ、これにより富を増すことができるからでございます。つまり回教徒は嫡子でなければ家督を継げないからでございます。そこで王は機織の出来る部屋を三人の者に与えるようお命じになりました。

三人は「わたくし共が王を騙す意図のないことをお分りいただきますために、布が織り上げるまでこの部屋にわれらをお閉じ込めになられても結構でございます」と申し上げたものですから、王はこの言葉にいたく感激されたのでございます。そこで王は、彼らを一室に蟄居させられますと、布を織るに必要な多量の金や銀や絹に金子を予めお与えになったのでございます。

彼らは仕事に取り掛かると、機織をして時を費やしているかのように装いました。数日後、彼らのひとりが王の下へ参上致しますと『すでに布を織り出しております。その出来栄は他に類をみないほど美しく織り上げております』と奏上致しまし

た。さらに布の意匠や図柄をも述べると『ご覧にお出下さいませ。ただしお独りでお越し下さいますようお願い申し上げます』と申したのでございます。王は何もかもすっかり気に入られた様子でございました。

王は先ず他の者に確かめさせるべく待従を遣わされました。ところが彼には見た通りのことを申すようにはおっしゃらなかったでございます。待従が詐欺師達と言葉を交し、布の持つ不思議を聴かされますと、布が見えないなどはどうしても彼らに言えなかつたのでございます。そこで王の下へ再び参上致しました時、布を見たお申したのでございます。王は別の待従を遣わされました。ところがその者も同じことを申したのでございます。お遣わしになられた全ての者が布を見たお奏上致したものですから、王もご覧になりに行かれました。部屋へお入りになられますと、機を織っている彼らの様子が目に入りました。すると詐欺師達は「これが例の布でございます。どうぞこの意匠や図柄、それに色合をご覧下さい」と申したのでございます。三人は口を揃えて布の仕上り具合のすばらしさを言い立てましたが、実際は何も織っていないのでございます。彼らが織ってもいない布の様子をあれこれ申しているのに、それが待従達には見えて自分には見えないことにお気づきになりました。王は、己が身の破滅を思い知らされたのでございます。つまり、父とおもっていた先王の嫡子ではないから自分には布が見えないのだ」とご判断されたからでございます。ですか

ら、このことが漏れた際の王位の失墜を心配されました。そこで布を称え始められると、彼らの説明によく気をとめられたのでございます。

王室へお戻りになりました王は、布の美しさや出来栄えの見事さ、さらに意匠や色合までも廷臣達にお話しにいられたのでございます。しかしながら胸中の不安はお隠しになられたままでございます。

数日後、王は大臣に布を見に行くことをお命じになりました。王は大臣に布のすばらしさを前以ってお話しにいられました。早速大臣は出かけました。部屋へ入ると、機織をしている詐欺師達の姿が目に入りました。彼らは大臣に布の出来栄えを語りました。それは王からお聴きした通りのことでございます。ところが大臣には布が見えなかったものですから、自分は父親だと思っている人の実子ではないからなのだと考えました。そして、他人にこのことが知れたならば己が名譽の失墜であることを悟りますと、王同様に、或はそれ以上に布の出来具合を称賛し始めたのでございます。

大臣は王の下へ戻ると、布を拝見したことやそのすばらしさを口を極めて称えました。ですから王は増々ご自身の不幸を思い知らされたのでございます。大臣には見える布がご自分には見えなかったことは、王が先王の実子でないことは疑うべくも

ございませんでした。そこで王は布の持つ類い稀なるすばらしさと、それを織り上げ得るあの詐欺師達をこれまで以上に称えられたのでございます。

翌日、王は別の大臣をお遣わしにいられましたが、同じ結果となりました。殿にはこれ以上何も申し上げることはございませぬ。このように名譽の失墜を恐れるあまりに、王を初め國中の臣民達は真実に目をつぶり、誰ひとりとして布が見えないことを口にしようとはしなかったのでございます。かくして事はどんどん進み、一年で最大の祝祭日がやって参りました。一同はこぞって「祭りの当日には例の布をお着けになられるべきでございます」と王に申したのでございます。さて、詐欺師達が純白の布に件の織物を包んで参上致しますと、王にそれを差し出すふりを致しました。そして「これでどのようなお召物を仕立るのがよろしゅうございませうか」と尋ねました。王は好みの衣裳を申されました。早速彼らは王の寸法を測ると、すぐに仕立に取り掛かれるよう、まるで布を裁断するかのようなくさをしたのでございます。

祭りの当日がやって参りました時、三人は王の下へ仕立て上げた衣裳を持って参上致しました。そして王にはそれをお付けしたり、そのひだを伸ばしたりしているのだと思ひ込ませたのでございます。かくして王は衣裳を身に付けているものと信じ

込まれ、見えないなどは決しておっしゃらなかったの
 ざいます。王はこのように着飾って、つまり裸のまま馬に乗
 られると、市中を巡行されたのざいます。幸なことに季節
 は夏でざいました。

臣民達は王の姿を目に致しましても、嫡子でない者には王の
 衣裳は見えないことを承知しておりましたし、また外の者には
 見えているものと考えておりましたから、名誉が失墜するのを
 恐れて彼らは固く口を閉ざしておりました。かくして全ての人
 は自分だけの秘めごとであると考え、内緒にしたのざいま
 す。ところが王の馬丁である黒人が、彼には守るべき名誉など
 ざいませんので、王に近付くと次のように申したのでざいま
 ます。『王様、王様が私の父親のことをどのようにお考えにな
 られましよう、私にはどうでもよいこととざいます。そこ
 で私は王様に、私が盲かまたは王様が裸で巡行なさっておら
 れるかです』と申し上げます』と。すると王は声を荒げて『お
 前は下司な母親の子だから何も見えないのだ』とのしり出さ
 れました。黒人がそう言った時、それを耳にした別の黒人も敢
 えて同じことを言ったのざいます。このように次々と同じ
 ことを言われたものですから、ついに王を初め臣民達は、恐れ
 ずに真実に目を向け、詐欺師達に愚弄されていたことを悟られ
 たのざいます。早速三人の捜索をお命じになりましたが、

時すでに遅しでざいました。彼らはこのような手管で王を騙
 ったことで、とっくに逃げ去ってしまっていたからでざいま
 す。

ところでルカノール伯爵様、そのお方がご自分の申出を、殿
 の最も忠実なる助言者へ口外せぬようにと乞われておられます
 ことは、間違いなく殿を欺こうとの魂胆からでざいます。も
 し殿がそのお方とはほとんどご面識がないのでざいますなら
 ば、これまで殿と起居を共にし、殿の御手から数々の禄や恩恵
 を賜っておりますが故に、殿に仕え、ご領地の拡大に励まねば
 ならぬご家臣の方々よりも、そのお方は殿のお為となる数多の
 動機を種々お持ちでないことをご承知いただかねばなりませ
 ん』

伯爵はこれを有意義な助言であると判断された。そしてその
 通りに実行されたところ、結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、それ
 を本書に記させた。そして次のような詩を作った。

友には秘密にせよと勧める輩は、
 実よりも虚の方を喜ぶ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……